

綏遠事件と西北抗日情勢の新展開

寺 廣 映 雄

目 次

- はじめに
- 一 綏遠事件の特色について
- 二 援綏運動と國民政府の對應
- 三 「西北嚮導」からみた綏遠問題
- 四 陝北紅軍の動向と綏遠事件
- む す び

はじめに

53

西安事件直前の一九三六年十一月におこった綏遠事件は、第二次世界大戦前に日本が着手した内蒙工作の最後をなすものであったが、この事件そのものは日本がそれまでに實施した大陸侵略工作のなかでもっとも未熟なものであり、また西安事件の勃發によつて、その結末は中途半端に終つてしまつた。しかし、この事件が日中全面戦争の開始を目前にした緊迫した状況のなかでおこつたことは、中國全體に大きな反響と抵抗をよびおこした。もし西安事件がなかつたならば、このときすでに日中間の戦端が開かれていたであらうといわれるのも當然であつた。とくに陝西・甘肅・寧夏省など綏

遠・内蒙に隣接する西北地區の政治・軍事情勢にあたえた影響は少くなかった。ここでは綏遠事件そのものを分析するのが目的ではなく、事件をめぐる西北地區における抗日情勢との關連を考察するが、一應、最初に綏遠事件の特色について若干の點を指摘しておきたい。^①

一 綏遠事件の特色について

日本の内蒙工作はさかのぼって辛亥革命の頃にはじめて具體化し、滿洲國建國以後は主として熱河作戰を起點として土肥原・秦德純協定をへて西部内蒙古にたいする工作が本格化し、三五年十二月には、いわゆる察東事件をひきおこし中國側との緊張を急速に深めていった。そして翌三六年十一月、關東軍に後おしされた蒙古軍の部隊が綏遠省東部に侵入し、これにたいして綏遠省主席傅作義は直に應戰してこの部隊を撃滅し、さらにすすんで内蒙の重要都市である百靈廟を占領するという事件に發展したのである。

この綏遠事件の直接の發想は、同三六年一月に關東軍參謀部が作成した「對蒙（西北）施策要領（案）」^②にもとづき、四月にこれを本決定として直にこれを實行に移すため、關東軍板垣參謀長の承認のもとで第二課（課長、武藤章）が蒙古軍の編成に當ったといわれる。そして七月には板垣參謀長・武藤課長・田中隆吉・田中久の各參謀が德化で合議した結果、内蒙工作の積極論者であった田中隆吉中佐が内蒙特務機關長をかねて實際に綏遠作戰を指導することになった。

しかしこのような關東軍の内蒙謀略工作にたいして陸軍中央としては決して正式の承認をあたえていたのではなかった。すなわち陸軍としては三六年一月の「第一次北支那處理要綱」^③において支那駐屯軍にたいし「對内蒙工作は其範圍を概して外長城線以北に限定し且東部綏遠四蒙旗の地域に波及せしめざるものとす」と決定していた。また關東軍が作成提示したさきの「對内蒙施策要領」にたいし陸軍中央はつぎのような指示をあたえていた。

第一 方針

綏遠省南部並寧夏方面に對する施策は北支工作との關係等に鑑み主として支那駐屯軍之に任ずるものとす

第二 要綱

一、關東軍の行ふ内蒙軍政府の指導は穩密且内面工作に據り主として特務機關を通じ實施し、最少限の日人顧問團等をして之を輔佐せしむるものとす

七、關東軍の指導する軍政府管轄區域と冀察政務委員會、綏遠省、外蒙古等との紛争處理に關して陸軍中央部の指示を受けるものとす
陸軍省決定「對内蒙施策實施要領」^④

すなわち陸軍中央は三五年の華北分離工作の謀略をめぐって現地の天津軍と關東軍との間に對立・確執が生じたため、これ以後、華北の謀略については天津軍を當らしめ、關東軍についてはその活動を長城線以北に限定し、またその内蒙工作の方法にも一定の制限を加え、關東軍の暴走をいましめたのである。「こうして華北での行動を封じられた關東軍は、以後主としてその内蒙工作にその姿がクローズアップされる」^⑤のであるが、三六年一月に着想され十一月に勃發した一連の關東軍による對内蒙謀略工作は、最初から中央の意圖に反し、中央の制限をはるかに超える獨斷的行動であつたといえよう。このことは綏遠事件の第一の重要な特色をなすものであつた。しかもこのような關東軍の獨斷行爲にたいして中央が實質的に暗黙の諒解をあたえる結果になつたのは、「中央としては關東軍支那通謀略家の安全辨として提供せるもの」であつたといわれている。綏遠工作の第二の特色は關東軍が立案計劃したとはいふものの、實際は内蒙工作積極派である田中隆吉參謀による個人的な謀略工作の性格が強く、關東軍として直接この工作に積極的な援助をあたえたとはいえない。すなわち關東軍としては、この事件にたいして若干の兵器、戰車をあたえ、飛行機（滿洲航空株式會社）を出動させたことは事實であり、そのことが中國人に日本の侵略意圖を強く印象づけたことは後にのべる通りであるが、一方、關東軍全體としては直接これに關係しなかつたことも事實であり、あくまでも蒙古カイライ軍を利用する個人的あるいは關東軍第二課限りの祕密謀略の域を出るものではなかつた。十二月六日、上海發の「海軍情報部記錄」では「今回内蒙軍の行動

には我天津・關東軍共に直接の援助なく、從來内蒙工作として扶翼し來れる結果として相當精銳なる武器と飛行機參加の外、若干の特殊工作員の指導ある程度の如く云々^⑤と報告しているのは、このことを證するものであらう。

綏遠事件の第三の特色は、この謀略工作につかわれた蒙古カイライ部隊の素質がきわめて悪く、寄せ集めの軍隊であったことである。駐滿海軍部の「察哈爾方面視察報告」によれば、李守信部隊の「募兵には相當の困難を感じ、熱河省内蒙族よりもかり集め、又滿洲國匪賊を改變せるものも少數あり」^⑦。「見方によりては規格にかまはず集められるものを集め頭數を揃へたるものなり武器は關東軍にて世話したるものなるべし相當の恰好を整へあり」^⑧と報告され、また上海發「海軍情報部記錄」では「李守信の部隊は少々戰鬪力を有するも王英、包悅卿等の部隊は……所謂匪軍に類するもの大多數なり、其他内蒙土着軍の多くは訓練乏しく實踐の經驗なき爲戰鬪力なしと云はる」^⑨とのべている。したがって「目下の情勢より觀察するに内蒙軍は有力なる滿洲軍或は皇軍の援助なき限り所期の目的達成不可能なる如く」^⑩と結論し、綏遠謀略工作の失敗を豫言しているのである。

綏遠事件が結局、十一月二十四日綏遠省主席傳作儀による百靈廟占領、つづいて十二月四日金甲山部隊四千名の反撃失敗、一部部隊の反亂という内蒙軍および關東軍當局にとっては甚だ不本意な事態におちいった。しかもこの時、關東軍内では一部に出兵論がでたが「中央ノ方針ニヨリ現状以上積極的ニ出ラレズ」また「關外出兵ニ敕裁ヲ要スルコト勿論ナリトシ如何ニ結果ヲ導クベキカニ付テ苦慮」^⑪せねばならなかった。そのとき突如、西安事件が発生し、この大事件に世界の耳目が集中している間に、關東軍は事態を有耶無耶にするチャンスをつかんだ。つまり西安事件の勃發によって「綏遠問題ハ差當リ恰好良キ結末ニ至リタルモノ」^⑫といふことができた。

以上、この事件は陸軍中央の意圖に反して行なわれた關東軍の獨斷的行爲であり、しかも關東軍一參謀の個人的性格のつよい未熟な謀略として失敗すべき性格を最初からもっていたといふべきである。そして西安事件の勃發によって緊迫した日中開戦の危機が間一髪で延引された。結局、日本の大陸工作としては何のうるところもない事件であった。これに反

して中國にたいしては日中戦争の切迫した情況とくに當時の西北地區における抗日情勢の新しい展開にたいして重大な影響をあたえることになった。以下、その點をめぐって「西北嚮導」にあらわれた論調の推移と、長征をへて陝北に集結した直後の中共の動向を中心として若干の考察を加えたい。そのまえにまず一般の中國人や國民政府は、この事件についてどのようにこれをとらえ、どのような反應を示したかについて概観しておきたい。

二 援綏運動と國民政府の對應

當時の外務省出先機關からの電文は、この事件にたいする各地の新聞論調や一般輿論の動向を紹介分析して中央に報告している。それによると關東軍や日本政府がいかに辯明しようとも、この事件の背後には彼らの勢力が嚴然と存在し、今や「日本ハ遂ニ假面ヲ脱キ捨テ大陸侵略ノ正體ヲ現ハシ來レル」ものとし、「偽軍（蒙古軍）ノ綏遠侵略ハ日本ノ大陸政策遂行ニアリ先ツ綏東ヲ窺ヒ更ニ内蒙古ヲ併吞シ中國ノ支配權ヲ獲得セントスルニアリ……今次ノ積極的綏遠進出ハ外交上偶然ノ副作用ニアラス」^⑧とみて、綏遠進出を決して偶發的なものと考えず、日本の大陸政策遂行のなかでとらえたのは當然であった。さらにこのような情況下においては「綏東問題ハ實ニ日支衝突ノ導火線ナリ云々ノ說ヲナス者多シ」として日中間の戦争に發展する可能性が多いことを指摘し、この事件を一般に「國家存亡の分岐點」「支那民族生存ノ爲ノ血戰ノ序幕ナリ」ときわめて重大視したのである。

綏遠事件にたいする中國側のこのような評價は、日本の東北占領からひきつづく華北特殊工作の歴史的經過からみて當然のことと考えられるが、これら各地からの電文のなかで、つぎにかかげる十一月十八日廣東發、中村總領事の報告は、「國華報」の記事を紹介したものであるが、それは綏遠事件を日本の大陸政策のなかでとらえた具體的な記事として注目されるものである。

「某國ハ（一）蒙古占領ニ依リ大陸政策ヲ達成セントシ（二）蘇聯ト中國邊境トノ連絡ヲ遮斷セントシ（三）綏東地方ノ奥地ハ英米

ノ注意ヲ惹カス自由ニ蠶食シ得内蒙古自治ノ美名ニ依リ國際的非難ヲ避ケ得ヘシト思考シテ茲ニ綏遠ヲ窺ヒタリ仍テ中央政府ハ實力ヲ以テ蒙匪ノ綏遠侵入ヲ阻止セサルヘカラス然ラサルトキハ平綏沿線及山西、陝西ノ輿地モ河北ト同一ノ運命ニ陥ルヘシ」

すなわちここでは綏遠事件の發生を日本の西北地區からする大陸侵入計劃のなかでとらえているが、この點については次節でとりあげる「西北嚮導」のなかでより一層具體化されることになる。

さてこのような輿論のもとに全國各地においては義捐金の募集、慰問運動等廣汎な援綏運動が展開されてきた。それは日本の華北分離工作に對抗して結成された全國學生救國連合會、全國各界救國連合會等の積極的な抗日活動や、新聞言論機關の宣傳、世論喚起、さらに國民政府の抗日への鼓吹援助等によるものであり、しかもこのような運動が旅館業者、娛樂場、大商店より市營貧民住宅等の全くの下層民衆から、極端な例としては監獄囚人にいたるまで波及していったことが報告されている。^④

しかし、このような全國的全階層的な援綏運動にたいして國民政府は、この事件を利用して民族的危機感をあおりながら、一方ではあくまでも「スローガンハ抗日剿匪ヲ以テスベク」「中央訓令ニヨリ援綏運動ノ宣傳ニ努力スヘシ」と傳達し、この運動を國民黨の統制下におくことを企圖した。それは援綏運動の高揚によって運動の主導權が共產黨に掌握されることを恐れたからに他ならない。すなわち「援綏義捐金運動ハ元々抗日救國會ノ主宰ニテ計劃セラレ居タル處、同運動ヲ救國會一派ニ委ネルトキハ抗日氣勢一層盛トナリ事態益々惡化スル惧アルヲ以テ」、上海では「財界有力者協議ノ上、市商會・地方協會及赤十字總會ノ三團體ヲ聯合シテ綏遠剿匪慰勞救護委員會ヲ組織シ杜月笙・虞洽卿……等凡ユル財界有力者ヲ委員ニ舉ケ」ることによって、この運動から救國會を排除しようとした。また國民政府の中央新聞檢查處では、新聞や言論界の綏遠事件にたいする自由な批判を制限するため「綏遠事件ニ對スル學生其他ノ民衆運動ノ記事ハ此際檢查處ニ於テ嚴重ナル檢査ヲ加ヘ中央ノ統一ヲ破リ或ハ學生ヲ煽動シ又ハ共產黨ニ利用セラルルカ如キ記事ノ發表ヲ嚴禁ス」と

の訓令を發した。これは「昨年以來ノ學生運動ニ手ヲ燒キタル中央政府カ此際共產黨ニ利用セラルルヲ恐レテノ用意」であつたことはいふまでもない。

さらにこの綏遠事件を端として再び北京をはじめ天津・上海において學生を中心とする抗日宣傳のデモが激しく展開したが、とくに十二月十二日、北京で三千名の學生が冀察政權成立一周年に當つて行なつたデモにたいして警官・歩兵部隊を出動させて、これを鎮壓し數十名を逮捕するという行動に出た。このように國民政府が綏遠事件にたいしてとつた態度は、一貫して今までの安内攘外、抗日剿匪と基本的には變らず、そのことをはっきり示したのは綏遠事件が発生した十二月二十三日の「抗日七君子」の逮捕であり、さらに上海・青島の日本紡績會社における約十萬の勞働者が行なつたストライキにたいする彈壓であつた。

三 綏遠事件と「西北嚮導」

つぎに日本の綏遠侵入および綏遠事件にたいする中國人の考え方や反應を地域的に最も密接な關係にある西北地區を中心にして考察したいが、そのため當時の西安で發行された「西北嚮導」の論說によつてみることにする。

これら論說の多くは、東北地方をすでに手中におさめ今や華北の大部に勢力を扶植した日本が、つぎに侵略の對象とするのは必ず西北地區であることを多くの證據をあげて豫言している。たとえば「私貨深入西北」(第八期導言)、李承翁「關於西北走私」(第十一期)では、冀東貿易による經濟侵略がすでに西北地方に深く入りこみ、軍閥割據によつて經濟的發展がおくれたこの地方では、このため商工業が破産し農民の生活程度が極度に惡化しつつある現状を指摘している。それによると日本製品は青島から天津をへて西安・咸陽等の都市に多量に運ばれ、それらの都市では商品の六割が密輸の日本製品で占められているが、それはさらに甘肅地方深く蘭州にまで及び、ここでは「中山市場二百軒の商店及び市内の綿布商・海產物店にはほとんど國貨をみず、人造絲製品・綿製品や海產物など大部分が日本製品であつた」といわれている。

また三十六年になって滿鐵社員などの經濟視察員、武官、外交官などの西安各地への來訪が日とともに急増し、最近四カ月間で六〇餘人が數えられるが、滿鐵社員の西北地方視察は「滿鐵を以て西北經濟を支配せんとする野心」を明かにするものであり、あるいは外交官の大半が寧夏・蘭州にゆき、この地方に特務機關をおき無電を裝備しているのは「寧夏省・甘肅省がすでに日本の今後の侵略對象となつた」ことをあらわすものであると指摘している。このような「日本の行動が日に日に露骨になり實に輕視するに忍びない」情勢になつたことは「日本の西北にたいする侵略政策がすでに積極的になり危亡の機が肩臑に迫つた」ことをあらわすものと斷じている。

それでは、つぎに日本が西北地方を侵略する必然性はどこにあるかというところ、朱北峯「西北往何處去？」(第十一期)の論文では六つの根據をあげて詳論している。その要旨はつぎの通りである。

(一) 日本帝國主義は全中國を完全に併呑しなければやまないが、その侵略の段階は大體、東から西へ、北から南へと進む、すなわちまず朝鮮からはじまって西へ進んで滿州、さらに南進して華北を占領した現在、華北から西進して西北地方へ向う。今や第一段階(朝鮮)と第二段階(滿洲)が完成し、第三段階(華北)がすでに八割を完成した今日、第四段階である西北地方を占領することは必然の要求である。

(二) 日本帝國主義がすでに手中に收めた華北の地盤を保障するためには、必ずすすんで西北地方を併呑しなければやまない。

(三) 日本が中國北部を侵略した主な目的はソ連に對抗するためであつた。もし中國の西北地方を手に入れないとすれば蒙古を包圍することも、新疆に侵略することも、シベリアを横斷することもできず、逆にソ連が新疆から東へ出撃する危険性がある。したがって日本がソ連を征服するため、少なくとも外蒙古を征服するためには必ず西北地方を手に入れないならぬ。

(四) 日本が中國南部を征服するためには、中國北部だけでは不充分であつて、必ず廣大な西北地方をおさえないならぬ。

ない。

(四) 西北地方は中國ではまだ處女地であつて、新疆に一部ソ連の勢力が入っているだけで、その他の省には外國の特殊勢力がない。したがつて日本が西北地方に入るのに國際干涉を顧みる必要がないのはきわめて好都合である。

(五) 最近數年間、日本では經濟恐慌と人口過剰が問題となつてゐるが、西北地方は滿洲や華北にくらべて、さらに「地廣人稀」で最も都合の良い植民地である。

以上のような原因によつて日本が西北地方を侵略することは必然の情勢であるとし、さらにその具體的な侵略計劃を八段階に分けて述べてゐる。すなわち昨年（一九三五年）十二月偽軍李守信部隊が察東より綏遠に侵入し（察東事變）、また現在平綏線に日本軍人が出沒しているように、日本の西北地方への侵入はまず綏遠地方から開始されるであらう。ついで綏遠から寧夏へ入ると同時に、一方山西を通じて陝西へ侵入し、ついで綏遠・陝西から同時に甘肅に出、さらに青海省にすみ、ここにカイライ政權を樹立し、つぎに新疆省に入り、ここにはじめて日本の西北侵略計劃が完成する。したがつて綏遠問題は實にこの計劃の最初の段階にすぎない。九・一八事變後、日本は三、四年にして華北に入ったが、現在の日本のやり方は決してこのように緩慢ではなく、華北を完全に手に入れたならば、西北の危機はたちどころにあらわれるであらうと警告している。

ここで指摘しておくべきことは綏遠問題を外蒙及びソ連にたいする包圍政策にもとづく日本の西北侵略計劃の一環としてとらえる考え方である。このことは「西北嚮導」の他の論說にもよくみられ、これが綏遠問題にたいする、とくに西北地方における中國人の共通した考え方であつた。たとえば日生「綏東問題」（第十六期）に「有職の士は某國の考え方が内蒙をかすめとり西に向つて邁進し、一方では中國、ソ連兩方の聯繫を遮斷し、一方では外蒙にたいして包圍の形勢をととり、以て中部シベリアに進攻する準備を知つており、これによつて某國が必ず綏遠東部およびその以西をとすることはすでに歴然たるものがある」と述べてゐる。また同じ論者の「再論綏東問題」（第十七期）においても同様の考

え方を示し、綏東問題の重要な意義は、第一に日本が外蒙とソ連にたいする大包圍態勢をつくり滿洲北部にたいする軍事上の脅威を減少することであり、第二に中國の最後の國防根據地である西北地方の「建設」と「開發」を完成する以前に、一舉にこれを破壊せんとしていることである。したがって日本が綏東を侵略しさらに西北に進むことは不易の國策であり、中途でこれを放棄することはありえないと斷じている。

しかもこれらの論文で指摘された日本の西北侵略計劃の目的は、實は最初にあげた關東軍の「對蒙(西北)施策要領」(三六年一月)の内容と全く一致するものであった。すなわち「施策要領」第一、方針の項に「軍ハ帝國陸軍ノ情勢判斷ニ基キ對蘇作戰準備ノ爲、……其勢力(德王ノ獨裁スル内蒙古軍政府)ヲ逐次支那西域地方ニ擴大シ北支工作ノ進展ニ伴ヒ内蒙ヲシテ中央ヨリ分離自立スルニ至ラシム……其成果舉グルニ從ヒ之ヲ根據地トシテ其勢力ヲ綏遠ニ扶植シ次デ外蒙古及青海、新疆、西藏等ニ擴大センコトヲ期ス」と述べている。さらに第二、一般指導の要領の航空に關する項で「滿洲航空會社ヲシテ……百靈廟・綏遠・包頭・寧夏・阿拉善王府等ニ其航路ヲ確保セシメ爲シウレバ機ヲ看テ之ヲ青海ニ延伸センコトヲ圖ル」、また鐵道及港灣に關する項で「蒙古自治勢力ノ強化擴大ニ伴ヒ鐵道敷設ノ目標ハ平綏線ヲ甘肅・蘭州ヲ經テ新疆及西藏ニ又其支線ヲ庫倫方面ニ延長シ以テ實質的強力ナル對蘇工作上ノ幹線ヲ築クニアリ」と記している。

この案は最初にもふれたように陸軍中央部の承認をへない關東軍參謀部の獨自の立案であつたが、ここに示された西北侵略の青寫眞は前掲、朱北峯の分析と全く一致するものである。そして日本の西北侵略がまず綏遠地方から開始されるという豫言も、間もなく綏遠事件によって明白な事實となつてあらわれた。

今や「綏遠の存亡が單に一省の存在のみでなく、全民族の存亡に關わる問題」であることが明らかとなつた現在、これにたいしてどのような行動が必要とされるか。李子民「收復東北——保障華北——鞏固西北」(第十八期、九・一八、五週年紀念專號)において、西北地方は今や中國最後の國防の根據地であるのみならず、民族復興の出發點とならねばならないことが強調されている。すなわち「我々が華北を守らねば東北を保障することができないし、西北を固めなければ華北を保障

することができない。」いいかえると「鞏固西北、才能保障華北、保障華北、才能收復東北」この三者は全く不可分の關係にある。かくして「綏東問題が我々に重視されるのは、西北地方の土地と主權を保守するという一點にのみあるのではなくて、華北を保障し東北の失地を收復する」という重大な使命をになつてゐるのである。このように綏遠問題が一地方の問題としてではなく中國全體の運命にかかわるものである以上、全民族の力を結集して日本の綏遠侵出に當らねばならない。しかしそれを實現するには國民黨の根強い「安内攘外論」と矛盾せざるをえないことになる。

その點について綏遠問題が愈々急を告げる十二月一日に出された「綏遠問題專號」(第二十五期)所載の王飛「犠牲的の後關頭」では、「統一的連合救亡戰線を建て、具體的な力量と民族戰爭の焰によつて敵の進攻に答える」ことを要求し、「一切の不正確な理論は決して存在させてはならない」ことを強調した。さらに全國救亡戰線の發展を阻止しているベテシの議論として唯武器論、準備論、期待論、讀書救國論をあげ、民族の危機が焦眉の急に迫つてゐる今日「欲攘外、必先安内」に固執する限り、全華北・西北は必ず敵の手におちいつてしまふであらう、一國の政府が民意にもとづいて建てられている以上、政府は必ず全國の民衆が欲している民族抗敵戰爭を發動せねばならないと述べているが、これは綏遠事件によつて今まで政府が主張してきた「安内攘外」の論理にたいする破産を宣告したものといえよう。

このようにして西北地方において、綏遠事件に對處するため安内に先立つ全國的救亡戰線の結成が緊急の課題となつてきたことが明らかである。また、「西北嚮導」にみられるもう一つのアピールは、この救亡戰線の結成について「歴史地理上、また倫理上、特殊な關係をもつ東北軍が國土回復の工作上、特別な任務と作用をもっている」ことをのべ、彼らの抗日行動が絶対に正しいとしただけでなく、彼らが直に全力をあげて抗日に立ち上ることを要請したことである。すなわち李子民「怎樣打回老家去？」(第二十二期、十一月一日)では「彼ら東北軍將兵の抗日情緒と抗日行動は絕對正當なものであり、將來、事實は必ず、その正當なことと、少數の國民がそのことを諒解しないことの誤りを證明するであらう。東北軍は統一の破壊者、民族戰線の紊亂者ではなくて、逆に抗日戰線上、もっとも堅固かつ犠牲的な、力あり忠勇なる兵士で

ある。」とのべている。また林光漢「東北軍將士應奮起請纓抗敵」(第二十五期)ではつぎのように訴えた。「敵が綏東を奪えば、その結果として東北軍は必ず東北四省の故郷とさらに隔絶してしまい、戰略上で綏遠・チャハルから遼東・熱河の地をつく有利さを失ってしまう。」したがって「われわれは當面の事態が、たんに國家民族の生死存亡の問題であるだけではなく、同時に東北軍自身の生死存亡の關頭であることを知り、東北軍全體の將兵が、この現實をよく認識、把握し、ただちに起ち上って抗戰に志願するよう希望する。……一旦、綏遠を失えば事實上、君たちのへ打回老家去的歸路を斷ち切ってしまうことになるのだ。」

このようにして綏遠事件を契機として、今まで専ら剿匪に従事していた東北軍將兵にたいして、抗日に起ち上ることを強く要求し、その行動を支持することになった。このことは共產黨による東北軍將兵にたいする統一戰線結成への呼びかけ、あるいは西安において十二月九日、學生たちが行なった抗日要求のデモと正に符節を一にするものであったといえよう。そして、その背後には抗日要求が、今までの國民黨による剿匪一邊倒のワクをつき破ってゆく國民的輿論の強いものもあり上りがあったのである。

四 陝北紅軍の動向と綏遠事件

つぎに日本の對西北工作にたいして、當時、長征を終えて陝西省北部に入った紅軍の動向と、綏遠事件が抗日民族統一戰線の形成にどのような影響をあたえたかを考えたい。

毛澤東のひきいる第一軍團第一方面軍主力約七千と徐海東のひきいる第二五軍約三千、合せて約一萬の紅軍が陝北の吳起鎮に到着したのは一九三五年十月二十日で、これを迎えたのは、この地方で數年來、ソビエト區建設に努力してきた劉志丹のひきいる約一萬の部隊であった。^⑤これによって約二萬の紅軍が三五年中に陝北根據地に集結したわけである。ところがその大部分の部隊は翌三六年二月二十日から月末までの間に、結氷期に入った黄河を數カ所にわたって渡渉し、直に

山西省に出撃を開始した。いわゆる「東征」である。この紅軍の電撃的な山西侵入は決して何の前觸れもなく突如として行なわれたものではなく、實は「三五年末から共產黨のために山西省西南部の河津・夏縣・猗化等の地方がすでに赤化せられていた」し、さらに「同年末になっては益々猖獗をきわめ、黃河結氷期以後、山西危しと隨分喧傳され、……今日の山西侵入の如きも不可避の問題であるとさえ考えられる」ような情況にあったのである。

ところで困難な長征を終えてやっと陝北に着いた紅軍が、新しい根據地で充分な休養と補強をとる間もなく、引きつづいて東征を開始した原因は何によるものであろうか。中國共產黨の公式文書では、紅軍が抗日救國の目的を實現するため、山西から河北あるいはチャハルにでようとし、閻錫山に協力をよびかけたことにたいし、彼がこれを拒絶したためであるという理由をあげている。

このことはすでに長征中に北上抗日の目的をかかげ、抗日のために戦略上有利な地域に入った紅軍が、まず抗日實踐の誠意を示す必要性を痛感したことを意味するものである。しかし、このような公式發表とは別に、當時の紅軍には、かかる行動に出でざるをえない必然性があつたと考えられる。その有力な理由としては第一に陝北地區における物質的經濟的缺乏があげられる。すなわち紅軍が長征を終えてはじめて陝北に姿をあらわしたとき、南京では「赤軍もついに地獄に落ちたか、あの瘠地で何萬という大軍を養えるであらうか、自滅するに違いない」という噂が立ったといわれる通り、この陝北をふくむ西北地方は中國の後進地域として、また一九二八年から一九三〇年までの間に大干魃から大飢饉がおこり、三〇〇萬から六〇〇萬の餓死者がでたといわれ、まだその疲弊した状態から立ち直っていない。したがって江西省の根據地時代にくらべて人的、物的な貧弱さはおおむねなかつたことは、當時、周恩來や吳亮平がスノーに率直に語つた通りであつた。紅軍がこのような地域にとどまる限り、兵力や物資の補給を充分に擴大することはできないし、むしろ日を追うてジリ貧状態におちいることは避け難いであらう。また「西北を積極的に防禦する意味からも、中共は江西末期のよう

うに圍剿を座して待ち、戰の主導權を再度喪失する愚と悲慘をくりかえすべきでなかつた。」つまり紅軍東征の目的は抗

日の意圖と姿勢を全國に示すという公式發表以外に、陝北根據地における物的・人的資源の缺乏が紅軍をして山西の豊富な資源に注目させたとともに、積極的戰術への轉換によつて紅軍兵士の士氣と抗日への意欲を高揚させることにあつたといえよう。^④

さらに日本側の資料によれば「毛、徐等の所謂紅軍甘・陝支隊の跳梁振りは一時、山西全省を席捲して綏遠・察哈爾を冒し新疆・外蒙間に堅固な赤色ルートを建設するかと憂慮された^⑤」とのべられている通り、紅軍の東征が山西から綏遠に入り外蒙・ソ連と連絡し、「これを以て蘇支共同戰線による北支および滿洲の包圍牽制を企圖しつつある^⑥」ものと豫測した。このような考えが果たして事實と合致するかどうか、またこのためソ連側の指導があつたかどうかを確認することはできないが、紅軍の山西進入が綏遠省との境界近くまで北上している事實や、山西進入に先立つて包頭・綏遠などにおいて陝北紅軍の先鋒隊、便衣隊あるいは黨政治工作員によるゲリラ活動が行なわれていたことを考えると、關東軍の西北工作に對抗して紅軍がこの時點において山西から綏遠・察哈爾への進出をひそかに企圖していたことが想像されるのである。

一方、山西進撃の實情については「總兵力は二萬ともいい三萬ともいうが、陝西に渡つた眞實の共產軍は二萬にも及ばないで、多くは附近の土民を徵發使用して雪達磨の如く増えた^⑦」といわれ、「既に山西侵入後、一カ月餘を経て剿匪軍事は何らの進展を示さず、例によつて紅軍を遠巻きにしているにすぎない。一方紅軍はこの間にも數千の便衣隊、政治工作員、宣傳煽動員等を山西、綏遠兩省の要地に放つて所謂政治七分、軍事三分の巧妙なる赤化侵略工作を進めた^⑧。」そして「共產軍が多數の土民を擁して省内狹少地域において而も兵力一四、五萬の包圍網を自由に行動しつつある實情は到底戰術常識では判斷しえないところ^⑨」となり、ゲリラ戰になれない山西閭錫山軍の虛に乘じ、抗日思想宣傳によつて民衆を味方にひきつけ自在に活動したのである。^⑩これにたいして閭錫山は「公道團」「防共保衛團」を組織し、主力軍に配合して紅軍の東進を阻止せんとしたが成功せず、やむなく蔣介石中央軍に救援を依頼する他なかった。^⑪この好機をとらえ山西

省の中央化を意圖した蔣介石は陳誠・胡宗南のひきいる七カ師團約十萬を動員北上せしめたのである。

ここで紅軍は三月二十二日からいっせいに山西省から撤退を開始し、五月はじめに完了した。この間、紅軍は山西省の三分の一にあたる十八縣を占領して抗日宣傳の任務を一應成功させるとともに約七千の兵力と武器その他を獲得したが、その突然の撤退は何に起因し、何を意味するのであろうか。

その原因について黄河以西に回師した紅軍が、五月五日に發した「停戰議和一致抗日通電」いわゆる「五・五回師通電」においては「ソビエト中央政府と紅軍革命軍委員會は國難を前にして双方が決戰することは勝敗がどちらのものになっても、すべて中國の國防力量の損失となり日本帝國主義が喜ぶところである。……故に山西において多くの勝利を得たけれども、あえて抗日先鋒軍を黄河の西岸に撤退させたのである」と主張した。すなわちここでは抗日統一戰線の實現を第一義とすることが撤退の原因であるといっている。しかし現實には紅軍の東征が中央軍十萬の派遣によって事實上阻止され不可能になったということが考えられる。そしてこのことを契機として中共は今までの反蔣抗日から逼蔣あるいは連蔣抗日への戰術の轉換を行ない、「五・五回師通電」を發するにいたった。そのことは四月五日、毛澤東・朱德の連名で發せられた「爲反對賣國賊蔣介石閻錫山樞阻中國人民紅軍抗日先鋒軍東下抗日搗亂抗日后方宣言」において、蔣介石を「萬惡的賣國賊頭子」あるいは「漢奸賣國賊」とよんでいたのが、「五・五回師通電」において蔣介石氏と改められていることによっても明らかである。さきにもふれたように紅軍の東征は、日本の西北工作にたいし山西あるいは綏遠に出て直接、對日作戰を展開しようとする「過境抗日」の意圖をもっていたと同時に、それによって蔣介石の反應をみようとする政治的狙いがあった。しかし蔣介石が中央大軍を北上させ、あくまでも紅軍に敵對し東征を阻止する以上、これを打破することは現在の紅軍の力を以ては不可能であり、したがって彼を敵に回すことはいたずらに犠牲を多くするものであると考え、このさい山西を撤退し、統一戰線に蔣介石を加えることがより現實的有利な戰術であると判斷したのではなからうか。そのことは決して紅軍が中央軍に敗北したことを意味せず、むしろ「八・一宣言」らしいの抗日民族統一戰線をい

かにして實現するかという原則のもとに、黨の主體性を發揮したものである。⑨

さて山西を撤退した紅軍は、保安に根據地を新しく建設するとともに、「四萬乃至五萬の兵力」をもって五月から新たな行動を開始し、第一軍團（左翼軍）と第二十五軍（右翼軍）の二手に分れ、陝西・甘肅・寧夏三省の省境地帯に向った。

いわゆる「西征」であるが、それには三つの大きな原因があった。第一に中央軍の包圍を打ち破り根據地を擴大強化することであり、事實この西征によって東西五〇〇キロ餘りの地域を解放する結果になった。第二に舊東北軍と西北民衆（回教徒）との間に抗日民族統一戦線工作を浸透してゆくことであった。それは遂に東北軍との間に部分的停戦を成立させ

「西征軍第一軍團と舊東北軍が甘肅省内の清水河をはさんで向きあった對峙線は三十六年六月頃には抗日統一戦線にかわつていた」のである。また黄河以東の甘肅・寧夏省境一帯は中國で最大の回教徒集中地域であった。ここで黨中央は三十六年五月「對回族人民的宣言」を布告して回民の民族的解放と獨立ならびに抗日統一戦線への参加を訴えるとともに、實際に回教徒にたいする紅軍の規律を徹底させ、抗日宣傳を行なった。その結果、一部では抗日回民軍の結成という事態が實現された。また三十六年七月に「對哥老會的宣言」を出して、この地方の秘密結社にたいしても統一戦線への参加を呼びかけた。勿論、このような徹底した統一戦線政策工作については紅軍兵士のあいだにおいても容易に理解されず、また甘肅・寧夏地方の民衆の政治意識が山西に比較して極めて低調であるため、様々な困難に直面したことは當然であった。

しかしそれらの障害を紅軍兵士にたいする教育工作を通じて次第に克服していったのである。第三の大きな西征の目的は、四川・西康各省に轉戦していた朱德・徐向前・張國瀾らのひきいる第二軍、および賀龍・蕭克らのひきいる第四軍の北上を助け、これと合流を計り、紅軍の大同團結を西北地區において再現することであった。この歴史的事件は第一・第二・第四方面軍の先遣隊が三十六年十月八日、甘肅の會寧・靜寧地區において合流することによって實現した。このことは黨自體として劃期的なことであるばかりでなく、紅軍の抗日への意氣を高め、合流によって約九萬の正規軍を擁する實力と相まって西北地區における近迫した抗日情勢にたいして重大な轉換をあたえる要素となった。

紅軍の大合流を豫測していた雑誌「東亞」の一論文は、この點についてつぎのように述べている。

「中國共產黨關係の宣傳文獻に現われるところを綜合するに、陝北を中心に中國紅農革命紅軍の集結が完成した曉には、この尠大なる勢力に根本的改編を施し、陝北一帯を根據地とし、山西・綏遠を第一線とする北支及び滿洲國包圍陣形の確立を急ぐと同時に、一切の舊怨を越えて抗日倒蔣を目指す所謂抗日連合軍の具體的結成に乗出さんとする計劃を抱いているものの如くである。……果たして全紅軍の集結が完成し、新疆及び外蒙よりするソ連との緊密な連絡が強化されれば、紅軍の支那各地抗日勢力及び反蔣勢力に對する權威信望も急速に擴大され、張學良を首班とする舊東北軍を始め、地方軍閥の一部、各省邊境の土匪、戰禍と天災と稅政とに苦惱する各地の窮民等の抗日連合軍への参加は、その可能性を倍化すること勿論である。ことに舊東北軍十五萬の大部隊は……今や蔣兵の意氣は極度に沮喪し、積極的な鬪志全然なきのみならず、機會さえあれば土匪化せんとする危險な状態にあるため、滿洲喪失の怨恨に起因し、その抗日連合軍への加盟は極めて自然の推移とみられている。」

また當時、現地にあったスノーはつぎのように觀察していた。

「赤軍の正規軍は全部いまや中國の西北部に集結し、保安と吳起鎮の工場に冬服がどんどん發注されていた。三つの大軍團の連合によって兵力はすでに八、九萬の裝備の良い老練の戰士を數えるにいたっていた。……中國における最良の赤軍部隊はすべて大きなあたらしい地域に集結し、同盟軍と考えられるようになった十萬に達する東北軍の同情的な軍隊が近くにいたので、赤軍はいまや統一戰線結成の提案も、南京政府によって切實な興味をもって聞き入れられるであろうと信ずるに至った。」

ここにあげた二つの記事は、いずれも紅軍が合流集結を遂げることにより、その軍事と威信がにわかに高まり、そのことが東北軍をはじめとする地方軍閥・土匪・民衆にあたえる重大な影響をのべ、今や紅軍の提唱する抗日統一戰線結成の機が自然に、しかも急速に熟しつつある現状を指摘している。

さて合流を遂げた後の紅軍は、上述のような有利な状況のなかで、ひきつづき統一戦線工作を浸透してゆく政策をとった。スメドレーによれば「毛澤東はすでに十月二十日には命令を出して、自衛のためやむをえない場合のほか、國民黨部隊との戦闘をやめ、もっぱら宣傳を強化するよう、紅軍につたえていた。また、東北軍を紅軍に編入することも、これ以上やらないように命じた。十月二十七日には、紅軍はいたるところで統一戦線のビラを貼ったうえで、敵軍の前面から撤退しはじめた」のである。このようにして合流後の紅軍は、西北地區における部分的な抗日から西北全抗日連合軍結成への展望をもつようになったのである。

さらに紅軍の行動について關心をもつものの間に重要視されたのは、合流後の紅軍が果たして具體的にいかなる方向に抗日の出路を求めていたかという問題である。當時の「天津大公報」の記事によつてみると、西竄、北竄および陝北への回竄の三つの方向に分けて豫測しているが、そのうち北竄すなわち寧夏・内蒙への進出と、西竄すなわち甘肅河西地方から青海にすすみ、ソビエトとの國際線を打開する途の二つが有力視されていたことが分る。また十一月十四日付「天津大公報」では合流後の紅軍の動向についてつぎのように觀測している。

「一、毛澤東部と合流後、全力を擧げて西進し、甘（州）・涼（州）一帯に新根據地を求める。二、黄河に沿うて東北に向い綏遠一帯に出路を尋ねる。過去の場合からいうと、毛澤東はすでに屢々寧夏を犯して未だ逞しくするをえず、朱・徐が連合して甘涼を犯すことは大軍の追撃下において必ず奏功し難い。故に殘匪の今後の動向は或いは第二のコースを執るであろう。」

また「朝日新聞」（十一月十二日付）の記事に「共產軍の朱・毛・徐らの約二萬五千は甘肅・寧夏より綏遠に入り、なお北上せんとする形勢にあり」とのべ、同日付天津特電を紹介して、「共產軍は今後、黄河結氷とともに易々と寧夏省に入るべきものと考えられる。かくなれば内蒙一帯の赤化が憂慮されることとなつて、この點からも北方の形勢に重大なる變化が生ずるのではないか」と推測している。雑誌「東亞」所載の一論文では、「西北にその主力を集中した共產軍の一部

は十月初旬より愈々甘肅省北部より寧夏省に侵入し、更に綏遠省に入った」という情報を傳えている。

以上に述べたところから、大合流後の紅軍の今後の行動として寧夏から綏遠に向うであらうとする観測が最も有力であり、またその計劃の一部が現實化しつつあったことが明らかである。一方、この點について紅軍自體が、その意圖を端的に示した資料を確認することはできない。しかし三十六年七月、保安近くの百（王？）家坪で周恩來が紅軍集結後における二つの戰術計劃についてスノーに語った言葉は、間接ではあるが重要な資料である。すなわち、

「合流に成功すれば、すぐ會議を開き、つぎのような二つの戰略計劃を討議するはずです。

第一案、南方ならびに東方に軍を展開、甘肅省南部に入って河南に向かい、必要ならば、そこで南京・日本雙方への對抗行爲に出るため、ソビエト基地構築を目指す。……

第二案、即時綏遠および内蒙に浸透、直接日本軍と接觸する努力をする。……第二案を採用すれば政治狀況が好轉した場合、紅軍が獨立で抗日戰にでられるだけの、強力な基地を建設することも不可能ではなくなるでしょう。」

ここに示された二案のうち當時の軍事政治情勢からみて、第一案は實現の可能性の乏しいものであるのたいして、第二案が様々な困難な條件がともなうにしても、やはり最も現實性のあるものといわねばならない。また地理的にみて寧夏省を南北に貫流する黄河を西に渡渉し、黄河に沿うて北上すれば内蒙に入り包頭をへて綏遠にいたるルートがあり、このルートは歴史的にも早く開けていた。そして紅軍は周恩來の示す第二案によって、このルートを利用して綏遠に進出せんとしていたことがほぼ確實視されるのである。では合流後の紅軍が一體、何故にこの地方への進出を企圖したのであるのか。

綏遠問題はすでに三十五年十二月におこった察東事件をきっかけとして益々惡化の一途をたどり、中國側では遠からず日本軍がここから西北地區へ侵入するとの豫測をもった。とくに綏遠・内蒙に隣接する地域を根據地としていた紅軍としては、このような情勢に強い關心を示したのは當然であり、またかなり正確な情報をもっていた。たとえばスメドレーによ

れば「三十六年十月二十六日、シャオ・ホ・チェンでこの地方にいる全紅軍の大集會がもたれた。林彪や、その他の指導者が立つて西北の情勢、紅軍と白軍との配置、日本軍の綏遠侵入などについてくわしく報告した。」と記されている。つまり、あくまでも抗日救國を第一義とし、合流によって兵力を倍化した紅軍としては、このような綏遠における重大事態に直面するに及んで、中央軍の包圍下において自らの抗日の出路をこの方面に求めようとしたことは想像に難くない。そして憂慮された蒙古カイライ軍の侵入は、ついに十一月十二日、綏遠事件として勃發した。

一方、このような西北地區、いな全中國にとつての危機的状況にもかかわらず、蔣介石は紅軍を黃河の東側地區で一舉に包圍殲滅せんと計劃し、十個師を動員討伐に向けていた。毛澤東は得意の遊撃戰で、この包圍軍を陝西・甘肅根據地の奥深く誘いこみ、ついに甘肅省環縣北部の山城堡において戰機をつかんだ紅軍は、十一月二十一日胡宗南の指揮する有力な包圍部隊（第一軍）に襲いかかり、これに潰滅的な打撃をあたえたのである。いわゆる山城堡戰鬭の勝利であった。これは綏遠事件發生から十日後で、援綏運動は全中國に廣がり、抗日救國の風潮は最高潮にたつていた。そして中國共産黨は、この機會を逸せず、これから十日後の十二月一日、蔣介石にたいして内戰停止・一致抗日を要求する書翰を送ると同時に、同日付で「綏遠抗戰に關する通電」を全國に向けて發したのである。

前者の書翰は中國人民紅軍二十萬を代表して毛澤東・朱德ら十二名の名において「蔣介石先生」に宛てたものであり、そのなかで「數月來、綏東の情勢益々危く、……今は綏遠の形勢、日に惡化におもむき、今日内戰を停止し、明日紅軍と先生の西北剿共の大軍が、すべて互に残殺する内戰の戰場から抗日の前線におもむけば、綏遠の國防力は數十倍に急増しよう」と訴え、蔣介石が紅軍とともに綏遠抗戰に立上るよう要求した。後者の通電は中國共産黨中央委員會、中國ソビエト中央政府の名において、(一)、大軍を出动して山西・綏遠前線に増援し、全國的抗戰を準備すること、(二)、紅軍への攻撃を停止すること、(三)、人民の抗日救國運動を解放し、言論・集會・結社の民主的權利を附與し、政治犯並に上海の各愛國領袖を即時釋放すること、の三項目を要求、つづいて「中國共産黨指導下の人民紅軍は一年來艱苦奮闘、東は山西に進み

西は寧夏に出たが、これは中國の領土主權の完成を保持せん爲に抗日の出路を探究した行動」であつたことを明らかにし、「しかるに南京當局は之を諒承せず、再三、紅軍の抗日への路を阻碍した」とのべ、「今次、紅軍が山城堡において中央軍の一部を消滅させたのは已むをえざる自衛行動であり、かつ對外妥協、對內揚武の主權者に警告を與えたものである。……全國紅軍の主力たる一、二、四方面軍はすでに集結を終り、一途抗日への道を歩むのみ。我々は即時、晉綏前線に出動して一定の抗日戦線を擔當すべく準備している」ことを宣言したのである。

すなわち、このとき紅軍がとつた行動は、綏遠事件によつて全國にまきおこつてきた抗日の要求を背景として、自ら綏遠抗戰の決意を示し、再度あくまでも抗日統一戦線の原則を貫徹することによつて、その實現を蔣介石に迫るものであつた。これにたいし二六〇個連隊を陝西・甘肅地區に集結し、紅軍への全面的攻撃を準備しようとした蔣介石は、再び西安へ飛び張學良・楊虎城と會見した。十二月九日、西安市内において内戰停止・一致抗日を叫ぶ學生の一大デモが発生し、今や抗日情勢が全西北をおおうにいたつた。張學良がかねて「東北軍の全部でなくとも、少なくともその一部をただちに綏遠に移動する動員令を發していただきたい。そして同地で日本帝國主義と闘い、神聖な使命を果している人々を援助させてほしい」という要求さえ、蔣介石によつて拒絶されたことは、西安事件の勃發を必然的たらしめたといえよう。

むすび

瑞金時代から二年の歲月と幾多の試練をへた紅軍が三十六年十月、甘肅省において再び合流に成功したことは、紅軍の戦力と士氣を高揚させた。しかも東征以後、抗日民族統一戦線政策の内容を反蔣抗日から連蔣抗日に變え、その政治工作を精力的に西北地區一帯に浸透させていったことは、この地方の民衆に大きな影響を及ぼし、とくに東北軍將兵にたいして今までにない衝撃をあたえることになった。しかもこの紅軍を包圍殲滅せんとした中央軍が逆に山城堡戰闘において慘敗を喫したことは、第六次圍剿計劃の失敗を暴露するものといえよう。

一方、この戦闘の直前に始った綏遠事件は、關東軍による西北侵略計劃の突破口をなすものとして、全國的な援綏抗日運動を爆發させることになった。西安においても「西北嚮導」にあらわれた輿論は、この事件を境にして國民黨の安内攘外論のワクをこえ、全民族的救亡連合戦線論へとエスカレートするとともに、東北軍が剿匪から抗日統一戦線に立ち上るよう將兵に呼びかけたのである。

また東征いらい山西あるいは綏遠・内蒙へと抗日の出路を求めていた紅軍は、この綏遠事件を抗日統一戦線結成のための絶好の機会と考え、綏遠抗戦への斷乎たる決意を示すとともに、全國に向けて再度、統一戦線の結成を訴えたのである。

要するに綏遠事件そのものは關東軍一參謀の試みた謀略工作にすぎなかったが、全中國の國內的・對外的諸矛盾が最も集中し尖鋭化していた西北地區にたいして、この事件は正に火に油をそそぐ作用を果たし、その矛盾を極點にまで高め、ついに西安事件という劇的なクライマックスを生んだ。そしてこの西安事件は、それまで鬱積していた國內の諸矛盾を一舉にして抗日統一戦線結成の方向へ止揚し轉化させていったのである。

註

- ① 綏遠事件について、まとまって書かれたものとしては、秦邦彦『日中戦争史』（河出書房新社）の綏遠事件の項、以外にみられない。なお事件に関する日本側の資料は『日中戦争』1（みすず書房『現代史資料』8）および朝日新聞社『太平洋戦争への道』別巻資料編、にほぼ集められている。
- ② 前掲『日中戦争』1、五四〇頁。
- ③ 右同書、三四九頁。
- ④ 右同書、五四七頁。
- ⑤ 島田俊彦『關東軍』（中公新書）二二二頁。
- ⑥ 前掲『日中戦争』1、五八九頁。
- ⑦ 右同書、五六〇頁。
- ⑧ 右同書、五九二頁。
- ⑨ 右同書、五九〇頁。
- ⑩ 右同書、六三〇頁。
- ⑪ 右同書、六三三頁。
- ⑫ ⑬ 右同書、六四〇頁。
- ⑭ 右同書、六三七、六四三頁。
- ⑮ 右同書、六四二頁。
- ⑯ 右同書、六四三頁。

- ①⑦ 右同書、六一八頁。
- ①⑧ 右同書、六五九頁。
- ①⑨ 「西北嚮導」、民國二十五年六月十一日。
- ②⑩ 右同書、七月十一日。
- ②⑪ 右同書、九月一日。
- ②⑫ 右同書、九月十一日。
- ②⑬ 右同書、九月十一日。
- ②⑭ 右同書、九月十八日。
- ②⑮ 陝北に到着した毛澤東の第一方面軍および徐海東の第二五軍の兵力については、スノー『中共雜記』（邦譯）一六七—一六八頁、參照。同様の記事は『中國の赤い星』（一九六八年版への注）にもみえる。なおスメドレー『偉大なる道』下、一一三頁では、毛澤東のひきいる縱隊を二萬と記している。
- ②⑯ 紅軍到着前における陝北根據地の發展と劉子丹の活動については、『赤い星』第六部、および、民國二十五年十二月十七、十八日付「天津大公報」所載の長城「陝北收復赤區視察記」（代）、『陝西共黨發生經過』に詳しい。
- ②⑰ 波多野乾一『中國共產黨史』第六卷、五一頁。
- ②⑱ 同右書、一一—一二頁。
- ②⑲ 黨中央北方局「抗日救國宣言」（波多野「前掲書」二二七—二二七頁、所收）および「停戰議和一致抗日通電」（『毛澤東集』第五卷、所收）
- ③① 貝塚茂樹『毛澤東傳』（岩波新書）。
- ③② 前掲『赤い星』第六部、1。
- ③③ 前掲『中共雜記』九三頁、一一〇頁。
- ③④ 藤井高美『中國革命史』三六八頁。
- ④② 前掲「赤區視察記」（代）（民國二十五年十二月四日付「天津大公報」）には、つぎのように記されている。「當出發時、曾經召集過幾次主要會議、慎重討論、都認為陝北的糧食已空、連春天也渡不過去、無論如何也要別謀出路、當時有的主張西竄寧夏、有的主張過河擾晉、最後還毛澤東決定過山西、第一、山西的糧食很豐富、第二又因號召對外、博得各方同情」また、同年八月二十四日付「大公報」の「朱徐毛彭等之新動向」と題する「社評」では、山西進入の理由を、第一に藉「過晉抗日」以博國民的同情、第二に陝北窮而晉西富、入晉可以得充分的糧食與現金的補助、第三に伴攻山西、可以轉移中央軍主力所在、すなわち共產軍の「聲東擊西之傳統的戰略」の三點としている。
- ④③ 「支那における抗日戰線」（『東亞』一九三六年六月號、所收）
- ④④ 「抗日倒蔣戰線の擴大強化と蔣政權の歸趨」（『東亞』三六年四月號、所收、および波多野「前掲書」九頁。
- ④⑤ 波多野「前掲書」四二頁。
- ④⑥ 前掲「抗日倒蔣戰線の擴大強化」。
- ④⑦ 波多野「前掲書」三七頁。
- ④⑧ 山西における紅軍のゲリラ活動については、たとえば二十五年五月九日付「天津大公報」では「匪方利用山地、沿山竄擾、乘隙轉趨平原、圍攻縣城、致國軍疲於奔命、共匪大有燎原之勢。」と記している。
- ④⑨ 肖華「渡河長征」（中國人民解放軍三〇年徵文編輯委員會編『星火燎原』4、所收）
- 「閻錫山吃了幾次苦頭、不敢冒然進攻了、爲了保住他的地盤、組織「防共保衛團」、「公道團」、配合主力沿汾河和蒲路嚴密設防、

阻止我軍繼續東進、與此同時、又再三催促蔣介石火速發兵山西。」

公道團の成立については「山西新軍叛變之眞象」（『中華民國開國五十年文獻』附錄、『共匪禍國史料彙編』第三冊、所收）につぎのように記されている。「民國廿四年八月間、赤匪由江西突圍竄抵陝北、晉省閻錫山氏奉命圍剿、鑒於赤匪之猖獗、非純恃軍事進剿所能奏效、遂主張加重政治設施、以增進剿匪力量。遂即提出「團結好人」之口號、於是年冬、創立「主張公道團」。閻氏自任總團長、晉省各軍政長官、均爲幹部、並於各縣・區・村立各級團部、組織普及全省。」

④② 前掲『赤い星』第七部、2。

④③ 前掲『毛澤東集』第五卷、所收。

④④ 前掲『中共雜記』一六八頁。

④⑤ 前掲『赤い星』第十部、3。「太堡子において行なった彭德懷の演説にも、西征の目的を三つあげているが、その内容はここでのべたことと一致する。」

④⑥ 肖華『紅旗漫卷西風』（前掲『星火燎原』4、所收）、岡本隆三『西征』潮出版社。

④⑦ ④⑧ 前掲『毛澤東集』第五卷、所收。

④⑨ 前掲『紅旗漫卷西風』前掲『赤い星』第八部、3、4。

⑤① 前掲『赤い星』第十部、3。

⑤② 前掲『中共雜記』一六九頁。

⑤③ 前掲『抗日倒蔣戰線の擴大強化と蔣政權の歸趨』

⑤④ 前掲『赤い星』第十一部、6。また吳起鎮は當時「ソビエト区内で最大の工場労働者を持ち、また赤軍の主要な兵器工廠の所在地として重要である。そのほかに織物工場、被服工場、製靴工

場、靴下工場および製藥所があった。」

⑤⑤ スメドレー『偉大なる道』下、一一七頁。

⑤⑥ 民國二十五年十月十二日付「天津大公報」には「川陝殘匪、合股北竄」と題して、つぎの記事がみられる。「據軍事家判斷、匪之合股集中陝甘寧邊區、因該地食糧不甚充足、網難持久、此後竄擾、只有西竄或北竄及回竄陝北之三個途徑、但回竄陝北、仍難解決其求生問題、而匪復不願西竄、所以匪之目的似在寧夏……」

また同年九月二十六日付「天津大公報」には「今後出路如何、竄往祁連山北麓、抑北通寧夏入內蒙」と題して、つぎの記事がみられる。「至一般人推測朱毛集會合後、將竄入祁連山北麓之甘肅河西地方爲新根據地、或北竄過寧夏而進入內蒙……」

⑤⑦ 同年十一月十四日付「天津大公報」中、「甘肅剿共之現段階、殘共今後的動向」の記事。波多野「前掲書」七五頁。

⑤⑧ 「最近における西北支那の動向」（前掲『東亞』三十七年一月號、所收）。

⑤⑨ 「天津大公報」記者として、一九三五年以降、約一ヶ年にわたって西北地方を旅行した長江は、その旅行記『中國の西北角』

（昭和十三年一月、改造社）において、寧夏省の黄河に沿うた中衛縣で堅固な大トーチカの群が約五里の半徑をもつて並んでいるのを見、「このトーチカは毛澤東・彭德懷等が黄河を渡るのを防止するために作ったもの」と記している。國民政府が紅軍の黄河渡河を嚴戒していたのが分る。

⑤⑩ 前掲『中共雜記』一一二頁。

⑤⑪ スメドレー「前掲書」一一七頁。

⑤⑫ 前掲『中國の西北角』三六七頁。「綏遠方面に伸びてくる外敵

の壓迫に對抗するためには、寧夏は甘肅・青海兩省の門關だ。寧夏一たび破れば、甘・青は安全を期し難い。」

中西功・西里龍夫共著『中國共產黨と民族統一戦線』一〇七頁。「綏遠抗戦が開始されているとき、紅軍はその抗戦部隊の直接後方である綏遠、山西北部を脅威せず、反對に西方に道をとったのであるが、これは綏遠抗戦場に達するひとつの重要な道であった。」

⑤② 聶榮臻「結束第二次國內革命戰爭の最後一仗——山城堡戰闘」、魏洪亮「夜戰山城堡」（前掲『星火燎原』4）。前掲『赤い星』第十二部、1。

⑤③ 前掲『毛澤東集』第五卷、所收。

⑤④ 前掲『中國共產黨と民族統一戦線』一〇八、一〇九頁。滿鐵調查部編『抗日民族統一戦線運動史』所收。三九年七月。

⑤⑤ 李連璧「古城怒火——憶西安事變前後西安的學生運動」（『一九四九回憶錄』所收）。

⑤⑥ 前掲『赤い星』第十二部、1。注によれば、この手紙は西北軍事委員會が一九三七年一月二日西安府で發表。

會 告

近來の諸經費高騰のため、本誌の刊行がきわめて困難な狀況となつて参りました。

つきましては、今卷（第三十二卷）より左記の如く會費を改定いたしますので、御了承下さいますようお願いいたします。

新 會 費 （年間） 二、〇〇〇圓

舊 會 費 （年間） 一、五〇〇圓

事情御賢察の上、今後共、從來に倍する御支援、御協力を賜りたくお願い申し上げる次第でございます。

なおバックナンバー價格につきましては、最新刊價格相當額とさせていただきます。（裏表紙裏面参照）

東 洋 史 研 究 會

(Turbid) party, and the suppression of the Qing-liu by the Zhuo-liu. The Qing-liu party consisted of bureaucrats, tai-xue-sheng 太學生 (imperial university students), jun-guo-xue-sheng 郡國學生 (provincial students), and rich men who behaved like you-xia 游俠的富豪. Most of them belonged to the great families. The local Qing-liu cliques were also led by persons who hailed from the great families. The Qing-liu aimed to maintain the great families' local control by the cha-ju 察舉 system, which had been established in the course of the Han period, and by monopolizing the Xiang-ju-li-xuan 鄉舉里選 system and becoming bureaucrats. The Confucianism on which they based their criticism against the eunuchs, functioned as the ideology which assisted them in maintaining the cha-ju system whereby the relations between the state and the great families complemented each other. However, as the majority of the Qing-liu party hailed from the great families, which were contradictory to the Xiang-li 鄉里 society of the Han period, the Qing-liu movement was after all not able to unite with the masses of Xiang-li society.

This is the reason for their defeat and the appearance of recluse-like personages (逸民的人士) who aimed at solidarity with the masses in order to reconstruct the destroyed Xiang-li society of the Han period. The role of these recluse-like people was therefore to become important in the formation of the aristocracy of the Wei 魏 and Chin 晉 periods.

The Sui-yuan 綏遠 Affair and New Developments in the Situation of the Anti-Japanese Movement in the North-western China

Teruo Terahiro

The Sui-yuan 綏遠 affair was an amateurish plot framed and carried out by a group led by a staff officer of the Kwan-tung Army 關東軍, who aimed to invade North-western China. This affair provoked the

Chinese people to strong resistance, and brought about a new development in the situation of the anti-Japanese movement in North-western China, as it occurred in a tense atmosphere on the eve of the all out war between Japan and China.

In this article, the author traces the reaction of the Guo-min-dang 國民黨 against this affair, the upsurge and shift of the tone of anti-Japanese arguments through the Xi-pei-xiang-dao 西北嚮導 (published at Xi-an 西安), and the activities of the Red Army 紅軍 which collected at the Shan-pei 陝北 headquarters after Chang-zheng 長征 (the Long March). The author shows through these studies that the time for the formation of an anti-Japanese united front, the formation of which the Communist Party of China had appealed for, was nearing rapidly, making the Sui-yuan affair a turning point.

Rise and Progress of the Qing-hai 青海 Nomad Tribes

Hisashi Satō

A great change occurred in Qing-hai 青海 and Tibet at about the turning-point from the Ming 明 dynasty to the Qing 清 dynasty. That is, Guši qan, the chief of the Qosiγud branch of the Oyirad tribe, leading his branch, entered Lha sa, helped the Dalai Lama establish his regime; after this event his branch was to be stationed at Qing-hai. This branch was called the Qing-hai Qosiγud branch. The eight sons of Guši qan were called the Qing-hai eight tayijis 青海八台吉; they had great political and military influence over the North-western frontier of China.

But the next generation exhibited a growing tendency towards disunity. At the beginning of the 18th century, the power of this branch decreased and, in inverse proportion, the pressure of the Qing dynasty upon this branch increased. Lobdzang danjin, one of the leaders of